

事例研究

神経性食思不振症患者の正常なボディー・ イメージの受容への援助

下田弥千代・気谷 正美・永栄 久代・堂井 裕恵
(金沢大学医学部附属病院)

Nursing Intervention to Anorexia nervosa
with Body Image Disturbance

Yachiyo Shimoda, Masami Kidani,
Hisayo Nagae and Hiroe Doui
Kanazawa University Hospital

要 旨

この研究は、神経性食思不振症の1例に対して行なった看護活動が、患者の回復に関しどのように関わりがあったかを評価する目的で行なった。方法は、患者の病期を3期に分類し、看護記録に記載された看護婦の全発言を、スナイダーのカウンセラー範疇を用いて分類した。そして看護婦の発言の特徴を分析し、以下の結論を得た。

- 1) 非指示的範疇の発言については、その中で最も受容的な項目である「簡単な受容」が全経過を通じて最も多い割合を示した。
- 2) 指示的範疇の発言の構成は、その中では受容的な傾向をもつ「是認と激励」が全経過を通じて主であった。一方、操作的な項目である「行動の提示」は、病状の改善につれて著明に減少した。
- 3) 看護婦の受容的発言が、患者が看護婦を受け入れることにつながり、ボディー・イメージの正常化に役立ったと考えられた。